



日影眩、二年振り二度目のステップス個展である。前回、日影はオーソドックスな「リアリズム」と背景に侵食/対象が溶解するという二種類の作品群を展示したが、今回はほとんどが侵食/溶解であった。画廊内には大型と中型の作品が9点、入り口に中型1点、事務所に小品4点、中型3点と、計17点の作品を展示した。

日影の作品から、様々に示唆される。私は2015年の4月に初めてNYCへ行き、一日を日影と過ごした。日影のアトリエに招待され、ブルックリンを私の家族と森本利通で行進した。忘れ難い思い出である。日影は勿論、対象を選んでいるだろうが、その時に目撃した風景こそ、日影の作品の世界そのものである。

私は今回の考察に、中村英樹『いきのびるアート』（法政大学出版局/2015年）を援用する。

「西欧近代の「自我」と東洋の「没我」の限界を超えて、双方の不備を補う第三の主体構造がどのようにして成り立つのか」（まえがき）を前提として、中村は論を進めていく。この一文こそ、日影のために書かれたのではないかと錯覚する。日影の作品の技法は西洋的であっても、主題である人間は必ず没我であると私は感じている。

「西欧近代の視覚的表現では、見ることへの偏りが生じ、見られることが軽んじられてきた。それは透視図法に顕著に表われ、他者に見られる身体的存在であるはずの人間が他者に見られない単一中心の静止した神の視点に立つことになる。従って、視覚的表現に見返されるように感じるものが次第に見失われていく」（8-9頁）。

日影の侵食/溶解は、正にこの欠点を補う技法となっている。自らの視座を侵食/溶解すること。示唆は続くだろう。

